【中国四川省大地震】

検査部/国際医療救援部　喜田たろう

5 月 12 日に発生した、中国四川省汶川を震源とするマグニチュード 8.0 の大地震は甚大な被害をもたらし、現時点で死者は 6 万 9195 人、負傷者は 37 万 4177 人に上り、1 万 8404 人がなおも行方不明とされています。

中国における赤十字組織である中国紅十字会（以下、紅十字会）は、国際赤十字赤新月社連盟（以下、連盟）の支援のもと、発災直後からテント、毛布、食糧などの救援物資を被災地に輸送する一方、救援チームや医療チームを現地に派遣し、懸命な救援活動を行ってきました。

私は 5 月 20 日より日赤連絡調整員として北京に入り、紅十字会や連盟との連絡調整、情報収集などを行った後に、四川省成都に拠点を移し、被災地への訪問、日赤からの救援物資の到着確認やその後の追跡調査を行いました。

被災地から遠く離れた北京でも、発災直後にはたくさんの人々が献血に訪れ、被災地での救援活動に参加するため、自主的に四川へ向かった若者も多かったそうです。私の派遣時には、街中には義捐金募集の窓口が多く設けられ、紅十字会本社ではたくさんのボランティアの方々が活動されていました。

四川省綿竹の漢旺鎮は、今回の地震で人口６万人のうち約６千人もの方々が亡くなられた町です。地震の発生した 2 時 28 分で止まったままの時計台や、今にも崩れ落ちそうな状態で放置されたままのビル群、まだ埋まったままのご遺体があるかもしれない一面の廃墟が、地震の凄まじさを物語っていて、その雰囲気に圧倒されました。

同時期に実施した日赤が支援したテントの追跡調査は、発災直後の混乱のため、どの地域にどこの赤十字社のテントがどれだけ配布されているのか、連盟も把握できておらず、当初は実施不可能な任務のように思われました。しかし配布記録の調査や職員同伴の申し出など、紅十字会からの全面的な協力に勇気付けられながら、車両や運転手さらに広報用カメラマンの確保など、追跡調査への準備を進めていきました。

それゆえ成都から 300km 以上もの道のりの後、トウモロコシ畑の中に Japanese Red Cross Society のロゴがはいった、真っ白なテントが立ち並んでいる光景を目にしたときは、感激のあまり涙が出そうになりました。またテントに住むたくさんの被災者の方から感謝の言葉をいただくこともできました。

今回ご協力いただいた四川省の紅十字会職員の多くが被災者でもあります。青川でテント暮らしをしながら、救援物資の配布管理をおこなう張さんもその一人で、「家族は全員無事だったけれど、家が全壊して身一つになってしまった。これから一体どうすればいいのか？」と将来への不安を感じながら、救援活動を続けています。

7 月には北京にて、国際赤十字の復興支援の方向性を決定する国際会議が開催されるはずです。寄せられた義捐金が、本当に支援を必要とする人たちのために使われ、そして被災地が一日も早く復興することを、心から祈りたいと思います。

中国紅十字会のメンバーと

廃墟、遠くに山崩れの痕
（四川省綿竹）

避難民キャンプに立ち並ぶ
日赤が支援したテント
（四川省青川）

テントに住む被災者と